【目次】

日常的な賑わいの場となった嶺岡牧……日暮 晃一　1
鎌の革命児～飛雀印鎌の歴史～……芝崎 浩平　9
ミニ企画展　牧士家に伝わる陶磁器
　食器が語る嶺岡牧の賑わい……　17

ミニ企画展　牧士家に伝わる陶磁器

食器が語る嶺岡牧の賑わい

会場：第3展示室　嶺岡牧での馬捕を地元では「お祭り」と言うように，多くの見物人が集まった。牧士家に残された接待用食器から，馬捕りを始め嶺岡牧があったことによる地域の賑わいを見てみよう。

日常的な賑わいの場となった嶺岡牧

日　暮　　晃　一

わくわくどきどき過ごして

Ⅰ．なぜ嶺岡牧が賑わったのか？

木製農具を人力で耕していた農業から鉄製の犂先をつけた犂を牛馬で耕す技術革新により，農業生産力を飛躍的に高めた。この古代農業革命（飯沼 1980）により，牧は経済基盤である原動力生産施設として社会に不可欠な場となった（日暮 2016a，2016b，2017a）。

原動力生産の場という牧の基本的性格は，８代将軍徳川吉宗が嶺岡牧に白牛を放し酪農を始め,産業の牧となるまで変わっていない。しかし，戦国時代は原動力の内でも軍馬としての利用する期間が圧倒的に多かったため，あたかも牧は軍馬生産の場のような姿であった。そのため，歴史的に見れば短期間の特徴で牧を捉え，牧を軍馬生産の場とする短絡的理解が横行跋扈している。しかし，戦国時代でも，農耕馬や馬搬などの輓馬もすべて戦いのために徴用されるのであって,「軍馬」という特殊な馬の生産は行われていない。このことは，戦いのために用いられた馬という意味での「軍馬」は存在しても、利用を限定した「軍馬」という概念が存在しないことを意味する。

この誤謬が端的に示すように，これまで牧の社会的意義を曲解し，牧とは「野馬」がいる山という程度でしか評価されてこなかった。そのため，牧に関する研究は狭隘な領域にとどまっており，牧と社会との相互関係に関する研究は皆無と行って過言で無い状態にある。しかし，牧も社会との相互関係の中で一定の変化を遂げており，発展の段階として捉えることができる。

嶺岡牧は平安時代に編纂された『延喜式』に記された銖師牧に遡り，丸氏，正木氏，里見氏の牧，江戸幕府直轄牧，そして明治期における地域畜産株式会社の牧と，断続的ながら 1000 年を超える歴史を持っている。この間，牧の姿も大きく変化していると考えられる。ここでは，江戸幕府直轄牧後期以降に絞り，嶺岡牧内の遺構と民具資料等から社会の発展による嶺岡牧の変化を，賑わいの点から捉えることとする。

Ⅱ．管理型放牧により牧内に従事者が日常的にいた嶺岡牧

牧というと，草原に牛馬がいる姿をイメージする人が多いであろう。江戸幕府直轄牧である小金牧を描いた絵をみても，道を行き交う人を除き草原に馬が点々といるに過ぎない（図１～図３）。

図１は歌川広重が小金原から富士山を描いいているが,そこには馬しか描かれていない。図２の渡辺崋山が描いた小金原の一部である釜原の図には，森が画す広い草原に馬の群れが草を食んでいる姿の他，一本の道とそこを通る親子が描かれている。しかし，通行人以外の人はおらず，飼養管理のための構築物も描かれていない。図３は，小金牧の中にはしる水戸街道を通る多くの通行人が描かれているものの，それ以外は草原と馬，そして疎らな灌木林が描かれているだけで，飼養管理する人も､そのための構築物も描かれていない。

今に伝えられているこれらの図が牧の実態を正しく伝えているならば，牧内の道を通過する人はいるものの，牧は賑わいと無縁の場であったと言える。

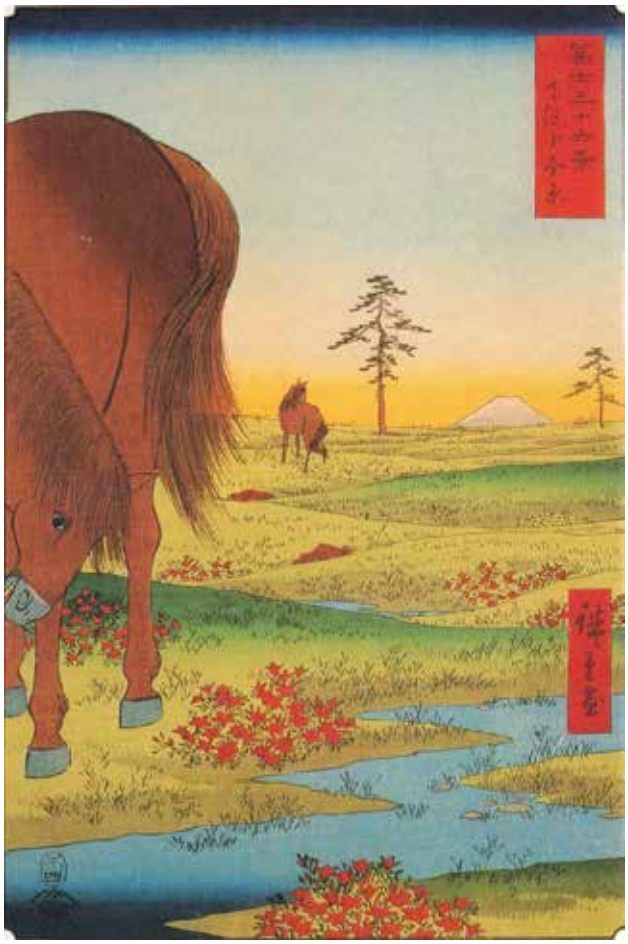


図１　歌川広重画　富士三十六景　小金原

資料：松戸市立博物館編（1994）p.8

図２　渡辺崋山画　四州真景図　釜原

資料：松戸市立博物館編（1994）p.8

図３　歌川広重画　下総成田道中之内　小金原

資料：松戸市立博物館編（1994）p.7

しかし嶺岡牧は，少なくとも３代将軍徳川家光の時には，冬季は購入飼料を与え，飼養管理を行うための厩舎及び管理を行う者のための小屋も建てられていた。

江戸後期，とりわけ 11 代将軍徳川家斉による牧制改革以降は，野付村毎に野馬除堀を伴う野馬土手で馬と牛の放牧地を分けて囲い，その中に管理用の小屋を建てている。また，馬の品種毎に繁殖管理を行う仮囲を野付村単位に設け，水飲用井戸，厩舎，管理舎を設けている。このように嶺岡牧は，細かく細分された牧内に，日常的な飼養管理を行うための施設が建ち，そこには草地管理や給餌管理など飼養管理を行う人が作業をしてる姿があった。

嶺岡牧は，他の江戸幕府直轄牧と異なり牧の経営様式として細かな管理を行う管理型放牧が行われていた（日暮 2017b）。このことは，嶺岡牧は日常的な働きの場となっていたと換言できる。

Ⅲ．嶺岡牧の祭り：馬捕

牧での賑わいと聞いて最初に連想するのが馬捕である。地元の人達は馬捕を，神社の祭礼のように「祭り」と呼んでいる。

嶺岡牧における江戸時代後期の馬捕の絵は確認されていないが，小金牧，佐倉牧には残されている。

1858（安政 5）年に新勝精舎から発行された，中路定俊著，中路定得補校，雪堤ほか画の『成田参詣記』（成田名所圖會）に小金牧の一つである下野牧の馬捕の様子を描いた「下野牧馬執りの圖」がある。雪航が描いたこの絵は，馬捕がどの様に行われたのかが分かる形で描かれている。棒を持ち蓑笠姿の勢子達が馬捕場に向けて追い，馬に乗った牧士が後ろから追い立てている。土手で囲んだ大込に追い込み，さらに捕込に追い込んで捕手が捕馬している。この図を見ると，大込の土手上には見物客がずらりと並び追い込まれてくる

図４　多くの見物客で賑わった馬捕の様子を描いた「成田参詣記」

馬の様子をみている。捕込の外には小屋がけの店がたち，捕込の土手上正面の御照覧場には幕府の御用で出向いた役人が馬捕りの様子を見ているほか，見物人でいっぱいとなっている（図４）。近隣の人だけで無く，見物客が集まった年に一度の催しとなっていた。

嶺岡牧では明治時代も牧が残り，馬捕が行われていたため写真が残されている（図５，図６）。馬捕場近くの家は，馬捕場のそばで露店を行ったなどの話しが伝えられている。

図５　嶺岡西牧の馬捕

図６　嶺岡東牧の馬捕（絵葉書）

この，馬捕の時に御用で出向いた江戸幕府の役人を接待した牧士の家には，もてなすための食具等が残されている（図 7 ～図 11）。

馬捕の見分で幕府の役人が牧に出向く時は，15 人～20 人ほどの供揃えであった（図 12）。その接待には牧士家総出であったであろう。

図 7　湯飲み茶碗を置く器台

図 8　飯椀・汁碗・蓋付き碗と銘々膳

図 9　鉄瓶

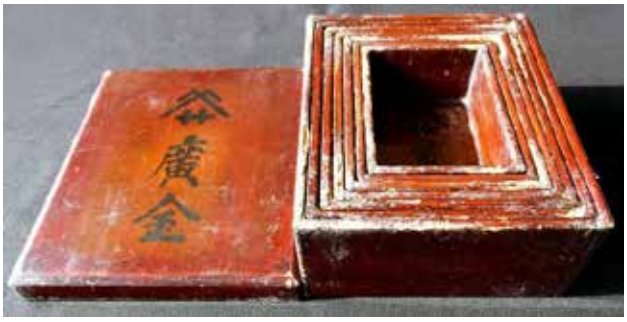


図 10　入れ子式の弁当箱

図 11　家紋が印された重箱

図 12　御捕場御用塩谷豊後守殿駿州愛鷹御牧場出張之図

資料：松戸市立博物館編（1994）p. 12.

Ⅳ．日常的な嶺岡牧の賑わい

野付村・野続村の人々が江戸幕府直轄牧内で行う経済活動として炭焼きが知られている。嶺岡牧でも柱木牧は炭焼が盛んであったが，他は活発な採石が行われていた（図 13）。

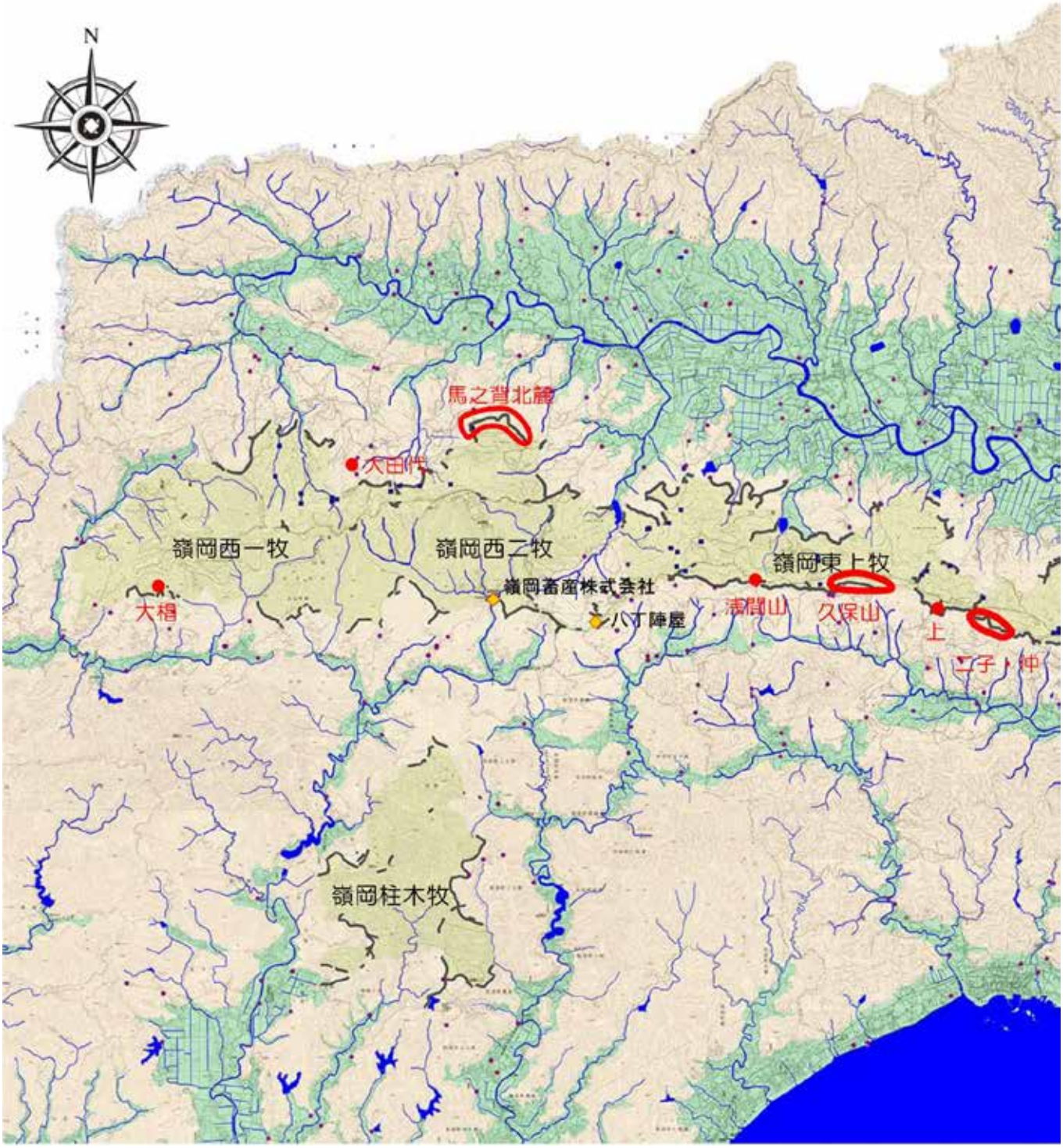
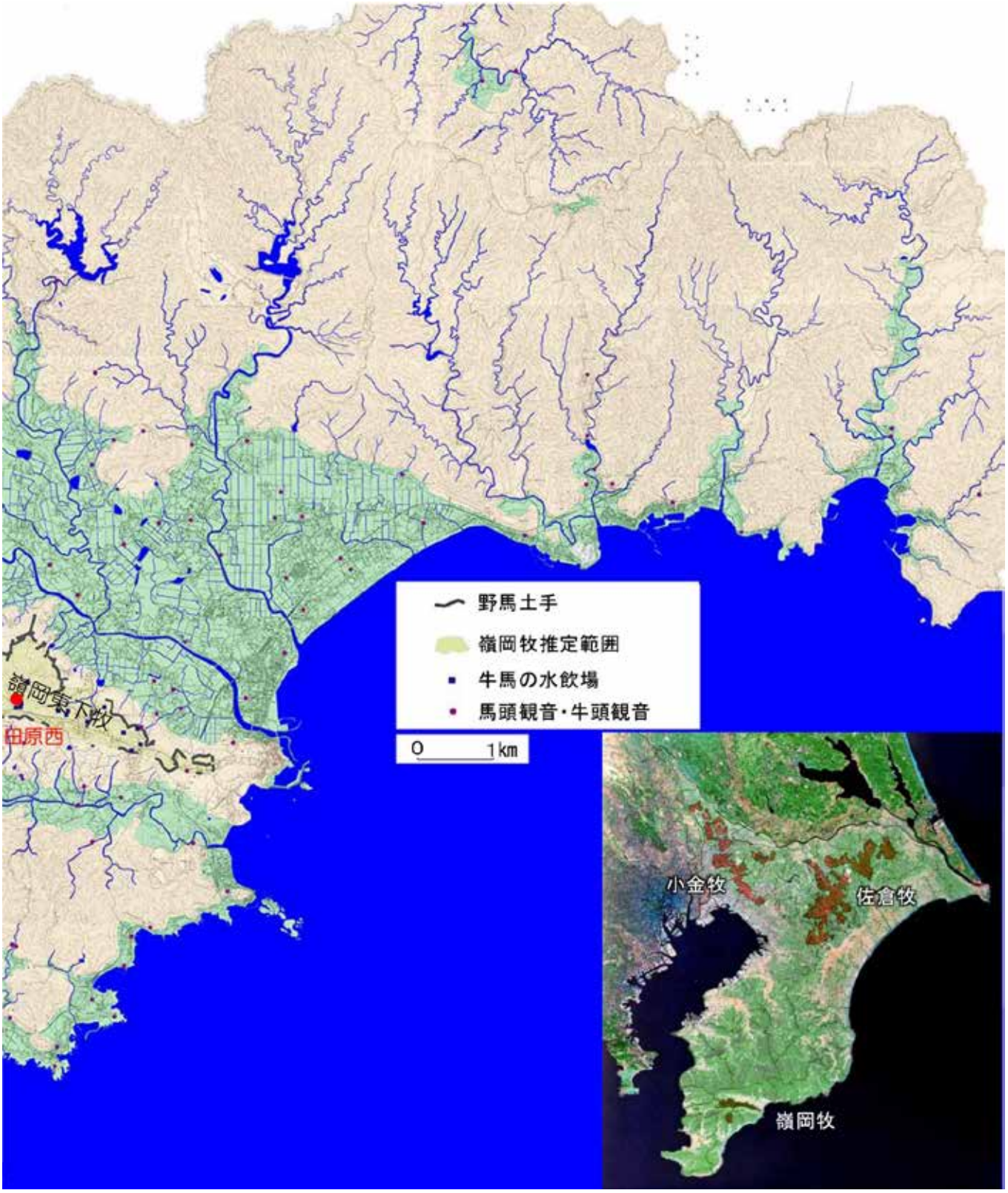


図 13　嶺岡牧内で現在確認している採石遺構の分布

嶺岡山に形成された牧遺構には，矢穴跡や鑿調整痕がある石材が多く使われている。母岩（図 14）や採石坑の存在をもって採石遺構としているため，現在は田原西，二子・仲，上，久保山，浅間山，馬之背北麓，大田代，大楫の 8 地区だが，木端石塚はそれ以外にも広く認められることから，より広範囲に採石が行われていたと考えられる。



嶺岡牧内で採石された石材は，石造物や建築資材等に使われており（図 15），牧遺構は石材の整形等で出た端石を用いている。江戸時代から採石した石材は市場流通させている。石材は当時から高価であり，牧内は大きな経済活動の場であったといえる。牧内に，石切に伴う建築等が多数造られ，日常的に多くの人が働く姿が浮き上がってきた（図 16）。

図 14　長方形の石を採ろうとした母岩

図 15　嶺岡牧内産の石で造られた関東１大きい石宮

図 16　採石丁場の木戸に転がる湯飲み茶碗

Ⅴ．地域の賑わいをもたらした嶺岡牧

白牛の乳を原料とした「醍醐」を生産するため嶺岡牧で白牛の放牧を始めてから，嶺岡牧は原動力生産の牧に加え産業の牧の面が加わりＳ字状カーブでそのウエイトが増していった。

江戸時代は，搾乳及び肥育を江戸で行っており，嶺岡牧は種付けから分娩までを分担していた。したがって，近代酪農の発祥の地は嶺岡牧から江戸の野馬方役所までと言うことができる。徳川将軍家により醍醐の原料である生乳を確保するための牧場を囲い込んだ第一次エンクロージャームーブメントは進展し，酪農の牧に，すなわち産業の牧となった。生乳の保蔵技術，輸送技術が低く，生乳という原料の腐敗性の高さと，質量が重く液体で扱いにくいことから，加工地と原料生産である搾乳の地が一致するという特異な形態をとるが，そこに近代産業の萌芽を認めることができる。このことは，嶺岡牧が一つの職場へと移行してきたことを意味する。

明治時代となり，江戸幕府直轄牧は廃止され，日本初の地域畜産株式会社の牧に移行したが，初期の嶺岡牧は馬と役牛及び肉牛生産を基本としており，近代的畜産業の形成に限られた。江戸時代からの酪農が途絶えたのは，牛疫により嶺岡牧に乳牛が皆無になったことによる。

近世の原動力生産と近代の経営様式の矛盾により短期間で嶺岡牧社は解散した。

1889（明治 22）年に嶺岡畜産株式会社が設立され，嶺岡牧経営が行われた。嶺岡畜産株式会社は経営の中心を酪農にシフトした。嶺岡畜産株式会社でも，繁殖に中心を置いていたが，乳牛頭数が増えたことも有り仔牛への哺乳だけでは余った。この余剰牛乳を処理するため，嶺岡牧周辺地域には製乳工場が 1890 年代から「雨後の筍のごとく」と称されるように多数建てられた。この製乳工場の発展上に，森永乳業，明治乳業が嶺岡地域で誕生した。

ここに原料農産物である生乳を生産する酪農と，生乳を原料として加工・販売する製乳業という近代的な産業間関係が形成された。この第 2 次エンクロージャームーブメントが，嶺岡地域に製乳業という新たな労働の場の形成と結びついたことで，嶺岡牧での酪農の発展が地域発展の原点になるという構造がつくり出されたのである。

Ⅵ. 祭りから日常的な賑わいの場，そして地域の賑わいの原点に

徳川吉宗は，武家が平和になれて質実剛健の気風，武道を忘れたことを憂いて，小金牧で大がかりな鹿狩りを行ったが，平和が続く時代となったことにより馬捕を楽しむ余裕ができ，「祭り」になったとみることができる。この「祭り」は，あくまでも晴れの日の賑わいに過ぎなかった。

これを大きく変えたのが，寛政の牧制改革であった。江戸幕府直轄牧での支出を抑える方針が出されたが，それを担当した小納戸役の岩見守岩本正倫は，新田・新畑開発による牧の縮小，牧内の資源を活用した産業育成により実現を図った。寛政の改革は，時代の流れと逆行する懐古的な発想で行われたが，岩本正倫の牧制改革は逆に，重商資本主義の促進を図った田沼意次の政策を一歩進め，産業資本主義を推進する政策を執った点を特筆する必要がある。それにより，岩本正倫は「神」として地域住民から崇められるまでになった。これにより，不明瞭な牧の範囲を明確化する必要性が増し，土手垣で牧を囲うことを進めた。これは，エンクロージャームーブメントの促進となった。

江戸幕府直轄牧の初期から管理型放牧を行っていた嶺岡牧は，他の江戸幕府と比較して経費がかかっていた。その経費を補う方法として「嶺岡白牛酪」という新たな乳製品を生産して利益をつくり出し収益性を高める方法を採った。このことが，嶺岡牧及び周辺地域の酪農発展と結びついた。安房酪農の展開は，岩本正倫の牧制改革があって成り立った点で高く評価できる。また，採石業をおこし，互酬性規範で牧をマネジメントしたことで，日常的に細かな牧管理の実現と管理経費の実現を実現し，牧は地域の賑わいの場となった。

そして，第 2 次エンクロージャームーブメントが進み，搾乳を行う酪農の牧と製乳業との関係が成立したことで，嶺岡牧が地域の賑わいの原点となったということができる。

【文献】

日暮晃一(2016a)食器類が語る牧のお祭り，2015 年度特別展Ⅱ　民具が語る牧での暮らし　記念講演会要旨，千葉県酪農のさと，pp.7-24.

日暮晃一(2016b)爽やかな汗で繋ぐ嶺岡牧再生―歴史文化遺産再生マネジメントへの道―，明日への文化財，(75)，文化財保存全国協議会，pp94-96.

日暮晃一(2017a)基調講演:遺構が語る嶺岡牧の姿，酪農乳業史研究，(14)，酪農乳業史研究会，pp4-1

日暮晃一(2017b)嶺岡牧が地域経済を活発にした，シンポジウム嶺岡牧の姿に迫る　要旨，千葉県酪農のさと，pp.1-8.

飯沼二郎(1980)日本の古代農業革命，筑摩書房，222p.

松戸市立博物館編(1994)特別展　馬と牧―かつて松戸は牧場だった，松戸市立博物館，54p.

鎌の革命児～飛雀印鎌の歴史～

芝 﨑　浩 平

市原市教育委員会ふるさと文化課

Ⅰ．民具としての鎌

民具を研究する身にとって，民具が現代社会でどう役に立つのか，どう活用できるのかを常に考えている。今回は鎌という題材を頂いたが，これほど私をワクワクさせる道具はない。

大地の生命力そのものである草は，有史以来様々な形で人の生活とつながり，肥料や飼料，燃料などになってきた。その草を活用しなくなった昭和 40 年代に,草刈機や仮払い機が登場し，鎌を使う機会が減った現在，我々は鎌から何を学ぶことができるのだろうか。

刃物鍛冶に聞くと，鎌は鉋や鑿の次に作るのが難しいという。一体なぜなのか。

鎌は薄くて鋭利にしなくてはならない。だが全体に薄いとコシもなくヘタってしまう。実際に草刈鎌の形状は，平面がなくすべて曲面であり，峰から刃先にかけて徐々に薄くなっている。

日本人が数百年かけて培った技術の結晶が鎌なのだ。それは土地の形状や地勢，技術の伝播によって少しずつ形を変えている。このような形状の中には，一つとして無駄な部分がなく，すべて意味があるのだ。それが見えた時，その道具の歴史を追うことでその土地の人々が何を考え，どう生きようとしたのかが見えてくる。

今回は，鴨川市曽呂で産声を上げた「飛雀印鎌」の歴史を追い，どのような鎌だったのかを考えてみたい。農家さんにとっては，かつて大変お世話になった鎌であるが，現在これほどの切れ味の鎌に出会うことはできない。

図１　『千葉県安房郡誌』掲載の鴨川周辺地図

Ⅱ．明治農具絵図の中の鎌

まずは,飛雀印鎌が生れる前夜を振り返ってみたい。 鎌の歴史は長く，千葉県でも古墳時代にはすでに使われている。しかし今回は江戸時代末期の片刃の鎌について考える。

しかし残念ながら消耗品の最たる道具であるため，江戸時代の製品はあまり残されていない。

そこで，明治の初期に江戸時代から使っている農具を描いた農具絵図というものから形を見てみたい。

図２　東京国立博物館蔵の『農具図面』（市原市）に描かれた鎌　資料：千葉県立房総のむら編（2010：60）

明治新政府は，農業の生産性向上のため西洋農機具の導入を図るが，地勢との相性や多額の経費がかかるなどの問題から，まずは国内で現行使われている農具を調査することに

した。その結果が，1872（明治５）年以降に作成された所謂「農具絵図」として残されている。千葉県内では上総地方を所管した木更津県で制作されたものが多く伝わっている。

これによると，鍬や鎌，唐箕や千歯扱き，馬鍬や大鍬など，かつて人力や牛馬を使った農耕具が絵とともに寸法や重さなどが描かれている。各地域の鎌を見比べると，刃は７寸５分～８寸（約 22～24 ㎝），柄は１尺８寸（約 54 ㎝）が多いことがわかる。絵を見ても，若干の違いが見られるものの，久留里鎌に近い形（図２）や越前鎌（図３）に近い鎌も見ることができる。ここから，寸法などはおよそ同じでも，各地域で自給自足された鎌や，江戸時代から流通している越前鎌などが使われていたことがわかる。

図３　東京国立博物館蔵の『農具取調書上帳』（袖ケ浦市）に描かれた鎌
資料：千葉県立房総のむら編（2010：46）

Ⅲ．久留里鎌の歴史

久留里鎌の発祥については，江戸時代に現在の君津市亀山湖周辺の草川原村の刀鍛冶榎本亀右衛門が，片刃の鎌を創始したとされる。

同じく草川原村の太田平吉（1824～1889）が榎本からその技術学び，1865（慶応元）年に久留里市場にて鎌製造を開始した。

図４　太田平吉が製造した久留里鎌

太田は，明治初期に成田や三里塚の牧場開墾地に自作の鎌を売り歩き，使用者の要望を聞きながら改良を加え，久留里鎌を完成させたという（図４）。

その特徴は，峰が厚く巾があり，刃裏が平らで刃とコミ間にひねりを入れて段差を作っている（図５）。これによって泥が刃に付きにくく，草が刃に残らず，少し太めな草木も刈ることが可能となった。山がちなボサラな土地に向いた鎌であった。

図５　刃とコミの間の段差

太田は多くの弟子を育て，久留里を中心とした地域で製造され，上総唐箕の行商人が唐箕と一緒に販売して歩いたおかげで，千葉県中央部に販路を獲得していた。明治 30 年代の初頭には県内の鎌製造数でトップを誇った。

Ⅳ．飛雀印鎌の誕生

飛雀印鎌つまり元祖房州鎌は，曽呂村仲の佐藤五郎左衛門家に生まれた佐藤政治（1864～1946）が，花房藩の刀鍛冶鉄水子國輝に 15 歳で弟子入りし２代目國輝を襲名，1876（明治９）年の廃刀令以降，刀から農具の生産に切り替え，日本刀製造の技術を活かして鎌の製造に着手することに始まる。

図６　佐藤家に残された政治の晩年

それまで鴨川周辺は久留里鎌が主流で，鉄水子國輝の弟子の中でも久留里鎌の製造に着手するものが出るほど浸透してい

たという。

そうして，1890（明治 23）年佐藤は自宅内で，久留里鎌を改良した，飛雀印鎌の製造を開始する。飛雀印鎌製作所の元工場長である相川博氏によれば，当初は久留里鎌のような厚手の鎌だったという。

その後佐藤は，1912（明治 45）年に表印「○に大」，裏印「（飛雀の刻印）」を鎌で商標登録をしている（図 7）。

図 7　明治 45 年 4 月 13 日付けの鎌の商標登録

大正時代に入ると，この頃には切れ味の良い鎌として有名となっていたようで，1917（大正 6）年に出版された『東房州案内』（亀田英良編）には以下のように記されている。

「▲飛雀印の草刈鎌製造を以て名高き鉄水子国輝工場主佐藤政治氏は，同村実業家として代表すべき価値の人である。祖先国輝は刀剣製作を以て誉れ高かりしも，時代は変移して明治維新となり帯刀を禁ぜらるるに至りてより，其の技を鎌鍛冶と転じ同所に於いて盛に製造を開始したるが，切味頗る良く逐次名声を高め，今や丸大印の飛雀鎌は日本全国は愚か満鮮方面へ輸出するの好況にありと云う。」

図 8　『東房州案内』（1917）国立国会図書館蔵
表紙（左）と佐藤政治の出した広告（右）

これは，観光案内的要素の多い冊子のため，若干の誇張はあろうが，曽呂村の実業家として紹介され，満州や朝鮮半島へも輸出する程となっていたようだ。

それを裏付けるように，千葉県統計書によると，1897（明治 30）年の安房郡の鎌製造数は，年間約 18,000 丁で，県全体の 1 割程度だが，年々増加し 1921（大正 10）年には約 62,000 丁と増加し，千葉県全体の約 5 割を占めるようになっている。

これは，佐藤の飛雀印鎌製造の業績が大きいと考えられるが，『東房州案内』にはもう 1 軒，江見村の鈴木國重鎌製造所も紹介されている。鈴木國重は，丸江印として木更津から東金，八日市場や久留里などにまで販売されていたと紹介されている。また，1922（大正 11）年刊行の『房総紳士録』には，佐藤の一番弟子と考えられる松本利吉が，田原村押切で飛鳥印の鎌を製造していたようで，その広告が掲載されている。

このように大正期には，鴨川周辺では複数の鎌製造工場が操業していたことがわかり，飛雀系統の房州鎌だけではなく，研究熱心な職人たちが技を競い合った，鎌の戦国時代とも呼べる時代を迎えていた。

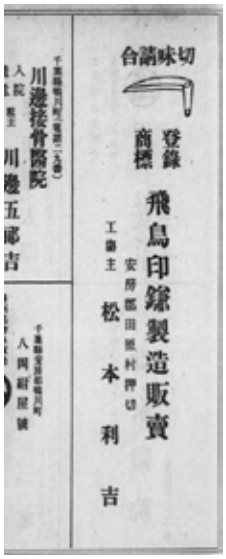


図 9　『房総紳士録』（1922）
国立国会図書館蔵

佐藤はこの間，多くの弟子を育て，弟子の製造した鎌を集めては，県内外に販売に歩き販路を広げていった。

こうしたことから，1937（昭和 12 年）曽呂の林秀院に門弟一同 34 人によって顕彰碑が建立され佐藤の業績を讃えている。

図 10　林秀院の顕彰碑

門弟一同

松本　利吉　加藤　政一
眞田　織　加藤　武雄
佐藤　米治　加瀬　博
苅込　菊造　須田長四郎
山口　鼎造　山田　嘉一
相川　政治　齊藤　米吉
川井　弥吉　鎌田鉄太郎
髙梨　富太　髙橋　春雄
鈴木　正　尾形　政吉
鳥飼芳太郎　大川　亀吉
山口　仁　鳥海　芳郎
相川健一郎　林　仕五郎
髙橋　与一　山口　福治
佐藤　謹司　川井　勝三
横山徳太郎　庄司　留吉
髙橋　進　經子　佐藤康
鳥海　隆　孫　佐藤政夫

やがて戦時色が強くなる昭和 14 年頃になると，材料の鋼材や燃料の入手が困難になってきたため，飛雀印の佐藤鍛錬工場では，資材の共同購入を目的に，佐藤の弟子 13 人で房州鎌小組合を結成し，曽呂村に共同の作業場を設けた。また，昭和 17 年頃には生産性を高めるため新潟県や兵庫県を視察し，スプリングハンマーなどを導入し機械化を進めるに至る。

1946（昭和 21）年，佐藤の他界後も弟子の相川政治が引き継ぎ，同 25 年には房州鎌工業共同組合と改名した。

相川政治の功績は，それまでの鎌に「コバ入れ」と呼ばれる表面にタガネで線を刻む工夫を行った

図 11　飛雀印鎌の部分名称

ことである。これにより飛雀特有の薄くても強度と粘りを出すことに成功し，以降この型が定着する。

この頃，昭和 28 年に日本初の鎌研究書である『日本鎌に関する研究』が報告される。ここでは，全国の産地鎌と肩を並べて飛雀印の房州鎌が，久留里鎌と共に紹介されている。ここでは，主な普及先として千葉，茨城，栃木，埼玉，群馬，神奈川の関東諸県が列記されている。

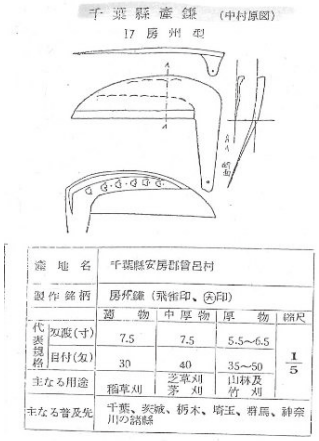


図 12　『日本鎌に関する研究』（1953）にある房州鎌

Ⅴ．飛雀印鎌の発展

佐藤が築いた販路は，相川政治や長男の喜一に引き継がれ関東一円に出荷されたが，戦時統制下の中，一時劣悪な模倣品が出回り裁判になったこともあった。それほどに飛雀が売れた時代があったことを，信州の鎌問屋のご主人は覚えていた。

販路拡大の方法として画期的な方法の 1 つが，特約店の存在であったと考えられる。飛雀印鎌は，県内 60 軒程の金物屋に卸していたが，中でも久留里の木村屋金物店と龍ヶ崎の中嶋喜一郎商店を特約店に指定し，青看板を店に掲げていた。一般小売店へはここから販売される方法を採用した。これによって遠方へ卸しは特約店が担うようになった。

図 13　特約店の青看板

になった。

信州や三条のような問屋が存在しない千葉県において，問屋の機能を有していたといえる。

一般の小売店はに赤い看板を配り，差別化を図りながら，ブランド化に成功した。

図14　販売店の赤看板

相川家に保管されている昭和48年～平成2年までの売上帳によれば，昭和 49 年が最多で，年間 33,000 挺に及び，取引先は 86 軒に及んだ。経営面では，社長の相川喜一が飛雀印鎌を支え，生産ラインでは，喜一の弟で工場長を務めた相川博が増産に努めた。

喜一が社長となってから，工場名を飛雀印鎌製作所とし，下のようなラベルを貼って出荷していた。

図15　鎌のラベル

昭和 40 年～50 年頃になると，鎌の需要は最盛期を迎えるが，生産量が需要に追い付けなくなってしまう。

時代は，徐々に手作業から機械化の時代を迎え，職人の高齢化も相まって，平成 4 年工場を閉め，ここに飛雀印鎌 100 年の歴史に幕を引いた。

ここからは，相川博氏が工場閉鎖直前に記録した飛雀印鎌製作所の写真をご紹介する。

図16　元工場長の相川 博氏と「飛雀鎌の歴史」

図17
鎌工場の外観

図18
鎌工場の内部

図19
打ち延ばし作業

図20
焼き入れ

図21
裏研ぎ

図22
仕上げ

Ⅵ．まとめ

実は，戦前から信州では房州型・久留里型の鎌を製造しており，現在でも製造が続けられている。現在はそうした鎌が，三条や信州の問屋を通して千葉県に流入している。

他産地で房州型として作られるほど優れた鎌を生み出した佐藤政治には，多い時は 60 人もの弟子がおり，県内各地に散らばり，飛雀印系統の房州鎌を世に出していた。

これまでを振り返ると，久留里鎌から発展した形状や，斬新な経営方法，千葉県にあって唯一の鎌工場として平成 4 年まで約 100 年創業していた事実。間違いなく鎌の革命児としていいだろう。

またなぜ「トビスズメ」だったのか。一説には，佐藤は雀が好きだったとか，稲作との関係などと推測しているが，私は嶺岡という土地柄，曽呂村が明治３９年までの産馬事業において嶺岡産の馬に「飛雀」の焼印を押していたことを無視できない。佐藤が飛雀を鎌の刻印としたことは，馬と同じように嶺岡産の鎌であることを意識し，愛着のような強い思いがあったように思えてならない。

図 23　嶺岡牧焼印
資料：松戸市立博物館編（1994：35）

付け加えておきたいのは，この飛雀印鎌の技術が，まだ 1 軒だけ残っていることである。

館山市正木の高梨欣也氏は，佐藤の弟子高梨富太の跡を継ぎ，裏かぶ印鎌として現在でも鎌を作り続けている。

図 24　高梨鍛冶屋の看板

最後に，今回の報告は，平成 27 年度千葉県立房総のむらの企画展「千葉の鍛冶－鎌と鋏－」で紹介した内容に追加したものである。この場をお借りして，調査時にお世話になった相川博氏，相川洋一郎氏，佐藤晟氏に感謝申し上げる。中でも相川博氏は，作り手自ら歴史を紡ぎ，記録を作成するという素晴らしい仕事をなされ，参考にさせていただいた。工場の写真も相川氏の撮られたものを使わせていただいた。ここに感謝と敬意を表し，以下にその全文を掲載させていただく。

相川 博著『飛雀鎌の歴史』

「房州鎌工業協同組合

組合員及び従業員名 ○印組合員（株主）

○佐藤政治（上）

佐藤政男，佐藤　功，佐藤五郎，佐藤富惣，佐藤　充，井上　誠，佐藤三樹夫

○相川政治（横渚）

相川喜一，相川　博，広田重雄，小磯祐三，川上光彦，鈴木庄一，本田　隆

○鈴木　正（宮）

島村　桂，鈴木悦夫，○横山徳太郎（花房）

○鳥飼芳太郎（畑）

高橋四郎，佐粧市男，○佐藤謹治（仲町）

○川井彌吉（広場），○高橋春雄（館山・腰越）

川上庄治，川井弘三，○細川芳郎（太海）

○相川健一郎（打墨）

鈴木孝太郎，神作一郎，鈴木敏夫（吉野）

○鳥海　隆（仲）

鳥海栄一，鳥海林治，荒川きん（谷口）

○加瀬　博（館山・加茂），佐藤さつ（鎌田）

細野良広，粕谷よし子（松崎）

鎌の歴史

房州鎌と久留里鎌は，型が良く似ている。房州鎌の中でも販路を延ばし，平成四年まで製造が続けられていた「とびすずめ」という商標の鎌を久留里鎌と比較すると，輪郭の形はほとんど変わらない。ただしトビスズメは，みねの裏をへこます

のはみねを薄く，軽くし，薄い鎌を作る分強度をつけるための工夫である。同じ大きさの鎌では久留里鎌の方が重く，荒っぽいが力の入る鎌であったと云えよう，またコミの付け方も違い，久留里鎌は刃とコミとの境にコミを起こすようにひねりが入る。このひねりは，草などを根元から短く刈るための工夫で草を刈った時，久留里鎌には泥がのらないという評判があったという。このような違いのうち，刃を薄く作り，嶺の下をへこませ飾りの線を入れるというトビスズメの特徴は昭和になって工夫されたもので，それまでは，コミの付け方を除けば久留里鎌と同じような鎌だったという。このことからも房州鎌と久留里鎌は元は一つであったのではないかと思われ，事実，鴨川でも大正のころまでトビスズメの佐藤政治と同じ鉄水子を師としながら久留里型の鎌を打っていた鍛冶屋があったという。

（注）鉄水子とは，鴨川に住んでいた刀鍛冶鉄水子國輝の事で明治初期の廃刀令により弟子の佐藤政治は鎌作りを始めた。トビスズメは安食，木下，竜ヶ崎，取手，河内町などの利根川周辺地域に大きな需要があった。八街，三里塚，成田と台地部の地名がまず上げられた久留里とは，当初は幾分販路を別にしていたかも知れない。蛇足ながらトビスズメは葉山，藤沢，横須賀，伊勢原，小田原など相模地方にも古くから販路を持っていたという，また明治の中ころには三条の金物商が県内各地に足をのばし，長野県信濃町や新潟県三条といった大産地で久留里鎌や房州鎌に似せて作られてくる鎌と本来の久留里鎌や房州鎌とが競合することになった。最終的には久留里鎌はどんどん先細りになっていくのだが，これは，競争に負けたと云うよりは，久留里鎌が需要に見合うだけの生産をあげることができずに他産地の鎌へ道をあけたという表現が適切のようだ。

久留里鎌製造場は，何れも規模小なるため多くはその問屋たる金物店と連絡を通じ，日々盛んに製造しつつあるも，未だ該製造大経営者の出ざる為需要者を満足せしむること能はず金物店においては，房州鎌を仕入れてその補充をなした。明治の中ごろに県内でもっとも多くの鎌が製造されたのは，君津郡であったのに次第に安房郡で製造が延び，君津郡では伸び悩んだ。販売に見合う生産が出来ず品質的にもあまり良いものが出来なくなっていったために，次第に販売の主力を房州鎌，特にトビスズメへと切り換えて行ったという，一方で信州や三条から久留里型に作った鎌が売り込まれた北総地方においては「久留里鎌は良い」との評判から需要は多いにも係らず久留里の製造元に力がないため金物屋の方から信州などの鎌屋に久留里方の鎌を作れないから注文がいく場所もあった。トビスズメが第二次大戦後さらに販路を広げようと北総地方に新たな金物屋を開拓して行ったとき競合相手になったのは既に久留里鎌だった。信州と三条の鎌では，いつしか信州の鎌が優勢になっていたようである。

久留里では昭和四十年ころに鎌専門の鍛冶屋が最後になり，その後１軒だけ久留里に残った石井鍛冶屋は，鎌のほか鍬や万能長芋掘り井戸掘り用具など注文に応じて何でも作る農鍛冶屋になった。金物屋に納めるほか久留里線沿いの農家へ注文取りにも歩き冬場は鍬のサキガケを主な仕事とした。

ちなみにトビスズメは戦時中に組織された組合が戦後も順調に発展し，ベルトハンマーなどの機械を導入し，流れ作業で能率を上げて生産を拡大したが，昭和四十年ころから生産が間に合わなくなる。昭和四十年から五十年の高度成長期は，鎌も飛躍的売れた時代だったが，その需要にトビスズメが追いつけず久留里の金物屋ではまず播州の鎌を仕入れて販売するようになった。三日月形の稲刈り専用の鎌で，薄くて軽く手間をかけずに作った鎌のため値段も安かった。長持ちはしないが，一時的には大変よく切れる鎌で，最初は稲刈り専用に広まったが，次第に草刈りにも使うようになった。

昭和五十年ころになると，いよいよトビスズメの生産が追いつかなくなり，信州などの鍛冶屋にトビスズメの見本を渡して作らせるようになった。草刈り・山刈り・鉈かまと何でもそっくりと

形を真似て作られてきた。売り込みもあったが，品質を確保するために金物店の方から作らせたというのが本当のところだという，昭和四十年から五十年くらいが農具の販売のピークで，この時期の需要にトビスズメは応えることができず他生産地の鎌が圧倒的な量で房州地方に流通することになった。その後，農業の機械化とともに農具の需要は急減し，トビスズメ鎌も職人の高齢化と相まって生産を減らし，ついに平成 4 年に作業所を閉鎖した。房州の地における鎌生産の歴史の幕引きであった。

トビスズメ鎌は，佐藤政治の操業も含めると約百年一世紀という協同組合は設立当初より五〇有余年である。

房州鎌（飛雀）

少し前なら都会でもちょっとした畑があってそこで鎌を振るっている人を見かけたものだそれが今では，千葉の農業地帯でも鎌を使うお百姓の姿はまれになった。何でも機械がこなしてしまうからである。いまでは，かえって一般家庭の需要の方が多いくらいである

昭和十四年に十三人の親方が集まって組織して作った組合も，現在 2 人，従業員も最盛期の終戦直後には四十人もの人が働いていたが現在は七人で，一日に三十丁か五十丁ほど生産している。販路は県内全域で六十軒あるお得意先の金物屋さんに卸す。

製造の工程

房州鎌のポイントは，沸し付けにある順を追って説明すると①鎌の大きさに合わせて鋼をきる。②切った鋼を極軟鋼に貼り付け接着剤として，鉄粉とホー酸を半々に混ぜ水で溶いたものを使う③それを一五〇〇度以上に白熱した火の中に入れて沸かし，ハンマーで叩いて一枚ものにする。」これが沸し付けである。出来たものを込み曲げをし，鎌の元型を作り，鎌の大きさにより引き伸ばしたものを鎌の形に整え型取りする。そしてマーク刻印を押し付けて，熱を加え，ハンマーで叩きならして，鎌特有の勾配をつける。仕上げ，仕上げは，さらに細かな工程に分かれる。まず焼入れ・次にひずみ取り，四番目は磨き，最後に刃をつける。ここで難しいのは

焼入れ，味噌塗って八〇〇度の火に入れ味噌のはがれ具合で焼入れの度合をはかる。こうして生まれたのが（飛雀印）の房州鎌である。鎌は，用途によって三種類に分類される。草刈鎌・山刈鎌・鉈鎌で草刈鎌一八㎝から二四㎝，山刈鎌は二四㎝以上鉈鎌は一八㎝以下である。出荷の多いのは草刈鎌，農業というより園芸用として使われている。値段は標準で一，三〇〇円程度である。房州鎌の由来は，明治の廃刀令によって，刀鍛冶から転業した先祖が始めたものという沸し付けの方法は刀作りに共通している

千葉県に出回っている鎌には房州鎌のほかに三つある一つは，久留里型，もうひとつは信州型，更に，播州鎌（兵庫県）がある。遠方の播州型はおそらく海路を通って伝わってきたのだろう鎌作りの工程は，それほど危険はないけれど熟練が要求される。勘に頼る部分が多いのだ夏は炉の熱にあおられ汗にまみれ，冬は吹きざらしの工場で皺を作ってやる鎌作りを誰が継ごうととするのだろう。」

【文献】

千葉縣安房郡教育会（1926）千葉縣安房郡誌
農林省四国農業試験場編（1953）『日本鎌に関する研究』
千葉県立房総のむら編（2010）企画展　房総の四季耕作図と農具絵図（2015）企画展　千葉の鍛冶－鎌と鋏，千葉県立房総のむら
松戸市立博物館編（1994）特別展　馬と牧－かつて松戸は牧場だった，松戸市立博物館

ミニ企画展　牧士家に伝わる陶磁器

食器が語る嶺岡牧の賑わい

染付芙蓉手柘榴に花文　手書き
大皿　江戸時代中期　古伊万里

千葉県酪農のさと酪農資料館第3 展示室
2019 年5 月2 6 日（日）～ 1 0 月6 日（日）
開館 9:30～16:30 月曜休館　入館無料

１．染付芙蓉手柘榴に花文　大皿	２．染付草花文　大皿
江戸時代(元禄～1800)　古伊万里 直径 31 ㎝，高さ 5.5 ㎝。器台外径 8.5 ㎝，内径 21.8 ㎝，器台高 0.8 ㎝。手書き。底に「冨貴　長春」の銘。	江戸時代後期(1830～)　古伊万里 直径 45.5 ㎝，高さ 7 ㎝。器台外径 25.5 ㎝，内径 22.7 ㎝，器台高 1 ㎝。２枚組。
３．染付草花文　大皿	４．染付山水文　変形皿
江戸時代後期(1800～)　古伊万里 直径 44.8 ㎝，高さ 7.6 ㎝。器台外径 25 ㎝，内径 22.5 ㎝，器台高 0.8 ㎝。２枚組。	19 世紀　古伊万里 長径 34.1 ㎝，短径 28.2，高さ 4.5 ㎝。長径耳部長 25 ㎝，短径耳部長 22.5 ㎝。中央が角丸長方形に凹む。
５．染付岩菊文　大皿	６．染付岩菊文　大皿
江戸時代～明治時代(19 世紀)　伊万里 直径 36 ㎝，高さ 4.5 ㎝。器台外径 21 ㎝，内径 19 ㎝，器台高 0.7 ㎝。２枚組。	江戸時代～明治時代(19 世紀)　伊万里 直径 36 ㎝，高さ 4.6 ㎝。器台外径 20.7 ㎝，内径 18.5 ㎝，器台高 0.6 ㎝。２枚組。

７．印判双鷹文　大皿	８．印判菊文　大皿
明治時代　瀬戸 直径 32.3 cm，高さ 3.5 cm。器台外径 20.3 cm，内径 18 cm，器台高 0.4 cm。	明治時代　瀬戸 直径 30.5 cm，高さ 3 cm。器台外径 20 cm，内径 18 cm，器台高 0.7 cm。
９．染付山水文　皿	10．染付山水文　皿
明治時代　瀬戸 直径 23.9 cm，高さ 4 cm。器台外径 12.7 cm，内径 10.5 cm，器台高 0.7 cm。3枚組。	明治時代　瀬戸 直径 23.9 cm，高さ 3.2 cm。器台外径 12.5 cm，内径 10.4 cm，器台高 0.7 cm。3枚組。
11．染付岩菊文　大皿	12．印判微塵唐草魚藻文　輪花鉢
明治時代　瀬戸 直径 19.2 cm，高さ 3.2 cm。器台外径 10.8 cm，内径 8.7 cm，器台高 0.6 cm。3 枚組。	明治時代　瀬戸 10 角形。長径 19 cm，短径 18.5 cm，高さ 6 cm。器台外径 11 cm，内径 9.3 cm，器台高 0.5 cm。口端厚 0.8 cm。外面は瓔珞紋。

13．染付松竹梅文　蕎麦猪口

江戸時代後半（18 世紀後半）　古伊万里
直径 8.2 ㎝，高さ 6.5 ㎝。器台外径 6 ㎝，内径 4.8 ㎝，器台高（内面）0.3 ㎝。口端に 6 箇所の切込み。手書き。２客組。

14．染付草花文　大皿

江戸時代後半（18 世紀後半）　古伊万里
直径 8 ㎝，高さ 6.5 ㎝。器台外径 6 ㎝，内径 4.6 ㎝，器台高（内面）0.4 ㎝。口端6箇所の切込み。手書き。2客組。

15．染付草花文　覗き猪口

江戸時代後期（1800～）　古伊万里
直径 5.2 ㎝，高さ 6.5 ㎝。器台外径 3.9 ㎝，内径 3.2 ㎝，器台高 0.6 ㎝。

16．染付草花文　覗き猪口

明治時代　瀬戸
直径 5.2 ㎝，高さ 6 ㎝。器台外径 3.9 ㎝，内径 3.1 ㎝，器台高 0.5 ㎝。

17．染付ざくろ文　覗き猪口

明治時代　瀬戸
直径 5.6 ㎝，高さ 5.8 ㎝。器台外径 3.2 ㎝，内径 2.8 ㎝，器台高 0.4 ㎝。

18．付印判蛙文輪花　小鉢

明治時代　伊万里
16 の波状口縁。直径 15 ㎝，高さ 3.3 ㎝。器台外径 8.6 ㎝，内径 7.5 ㎝，器台高 0.7 ㎝。

19．印判盆栽文　木瓜形皿	20．染付草花文　大皿
明治時代　瀬戸 長径19㎝，短径16.5㎝，高さ2.5㎝。器台外径9.3㎝，内径7.8㎝，器台高0.3㎝。	明治時代　瀬戸 直径 15.6 ㎝，高さ 2.8 ㎝。器台外径 8.8 ㎝，内径 7.3 ㎝，器台高 0.3 ㎝。
21．印判菊文　小皿	22．染付山水文　変形皿
明治時代　瀬戸 直径 15.8 ㎝，高さ 3.2 ㎝。器台外径 9.2 ㎝，内径 7.3 ㎝，器台高 0.4 ㎝。	明治時代　瀬戸 直径15.3㎝，高さ3.2㎝。器台外径9.3㎝，内径7.8㎝，器台高0.4㎝。

嶺岡牧祭り

日時	行事	場所
11月9日（土）10:00～13:00	チッコカタメターノ料理教室2019	三芳農村環境改善センター
11月10日（日）13:00～16:30	パネルディスカッション　嶺岡牧地域の食べ物「チッコカタメターノ」再発見	千葉県酪農のさと
11月16日（土）～24日（日）	嶺岡牧写真展	ら・みらどーる
11月16日（土）9:30～12:00	研究発表会	城西国際大学観光学部
11月16日（土）11:40～13:30	食フェスタ　チッコカタメターノ	城西国際大学観光学部食堂
11月16日（土）13:30～16:30	シンポジウム　安房に残された至宝「嶺岡牧」	城西国際大学観光学部AVホール
11月17日（日）14:00～15:30	「嶺岡紀行」を読む	大山公民館
11月19日（火）12:00～13:00	Dégradation 郷土の味　チッコカタメターノ	鴨川館
11月21日（木）14:30～15:00 18:30～20:30	ギャラリートーク トークパーティ	ら・みらどーる
11月23日（土）9:30～15:30	体験！酪農～嶺岡白牛酪づくり～野点	松本牧場・一戦場公園センターハウス
11月24日（日）13:30～15:30	グランドマザーズデイ　チッコカタメターノにまつわる思い出	里のMUJI開発工房セミナー室

主催　嶺岡牧を知って活用を考える会（※行事により異なる）
後援　千葉県酪農のさと／NPO法人EAS／鴨川市／鴨川市教育委員会
問合せ　嶺岡牧を知って活用を考える会（日暮）　Tel 090-4536-0488　メール ak22p-masaoki@gmail.com

千葉県酪農のさと嶺岡牧講演会　2019年度第1回
地域発展の拠点：嶺岡牧　要旨
ミニ企画展　牧士家に伝わる陶磁器 食器が語る嶺岡牧の賑わい
2019年9月7日発行
編集・制作　NPO法人エコロジー・アーキスケープ
発行　千葉県酪農のさと